研究ノート

シシ垣をテーマとしたネットワークづくり

Network of Shishi-Gaki

高橋　春成*
Shunjo Takahashi

1．シシ垣とは

シシ垣のシシを漢字にすると、「猪垣」、「鹿垣」、「猪鹿垣」となる。シシとは、イノシシ、シカ、カモシカといった肉がとれる獣類の古い呼称である。古くから、これらの獣は山間の住民にとって貴重なタンパク源であったが、一方で、イノシシやシカなどは農作物に多大の被害を与える害獣でもあった。

シシ垣は、これらの獣が田畑に侵入してこないように築かれた垣のことである。いまでも、江戸時代などに築かれたシシ垣の遺構が各地に残っている。当時は、いまと違って電気柵やトタン柵がない時代で、石を積んだり、土を盛ったり、木や竹などを組んだりして垣が造られた。

2．シシ垣の価値

シシ垣には、当時の農民の生活が深く刻まれており、地域の財産として極めて貴重である。歴史的・文化的に貴重であるとともに、地域の子供たちの総合学習や環境教育の教材にもなる。そして何よりも、先祖がどのようにして獣と向かい合ってきたのか、その労苦に思いをはせ、今日のイノシシやシカ、サルなどの農作物被害への対応の教訓にすることができる。

伝統的な農村社会では、住民たちは農作業、灌漑水路や農道の補修、害虫や害鳥獣の防除、水害対策などを協力しあって行なっていた。村落共同体がしっかりしていて、お祭りや冠婚葬祭などもみんなで一体となって行なった。シシ垣は、このような伝統的な社会にあって、田畑と里山の境界付近に、獣の侵入を防ぐために村人が共同して造った垣である。一つの集落の住民が協力して造ったものもあれば、二つ三つの集落の住民が協力して造ったものもある。

いまの時代はどうだろうか？

兼業化、高齢化、人口流出などによって農業離れが進み、田畑周辺には耕作放棄地が増え、

平成16年9月3日原稿受理　文学部地理学科

田畑と里山との境界があやふやになっている。このような中で、イノシシやサル、シカなどが集落付近に近づき、里中での農業被害が多発している。そして、いまの村落社会では、農業に対する姿勢や取り組みは一体ではなく、獣を阻止するマンパワーの不足も明らかである。先祖が生きた伝統的な農村社会の時代は、みんなが一体となって獣害に対応していた。時代は違うが、いま一度、シシ垣の時代を振りかえってみる必要がある。

3．シシ垣に注目するための取り組み

このようなシシ垣の価値についての啓発活動、さらにはシシ垣の有効活用と保存にむけての活動を広めるために、つぎのような取り組みを行なっている。

①「シシ垣ネットワーク」

「シシ垣ネットワーク」を立ち上げ、ホームページを作成した（http:homepage3.nifty.com/takahasi_zemi/sisigaki/sisimein.htm）（図１）。ここでは、シシ垣に関するいろいろな情報を提供するとともに、アクセス者間の情報の交流が行なわれるように「シシ垣広場」のコーナなどを設けている。また、典型的なシシ垣やめずらしい材料で造られたシシ垣などを写真で紹介するコーナもある。立ち上げ１年程でアクセス数は3000になり、シシ垣への関心の広がりに手応えを感じている。

②雑誌「地理」での「シシ垣」の連載

古今書院発行の月刊雑誌「地理」において、シシ垣の記事を７回にわたって連載した（表１）。シシ垣の研究者、地域のシシ垣の保存と活用に携わっている人たち、地域のシシ垣の調査をしている文化財委員、文化庁の文化財調査官、シシ垣を取材している新聞記者など、多方面の方々に私のほうから記事の依頼をし、原稿を書いていただいた。雑誌「地理」は、高校の教員など多くの読者層をもっており、シシ垣に関する関心が教育界や一般読者に広がることを期待しての連載であった。

③地域と連携した調査

シシ垣は、まずは地域のみなさんがその価値を認識し、地域の財産として大切にしていただく必要がある。そのようなスタンスから、滋賀県の比良山麓の志賀町や奈良県の川上村において、地域の方々と一緒になってシシ垣の調査を実施している（写真１、２、３、４）。このような調査により、地域の人びとにシシ垣の調査法や価値、活用や保存にむけての意義を理解してもらうようにしている。

調査は、奈良大学の私のゼミで行なっており、毎回、３回生、４回生、大学院生が参加している。参加した学生たちは、地域の人びととの会話や共同作業のなかでシシ垣に関わる諸々のことを学んでいる。

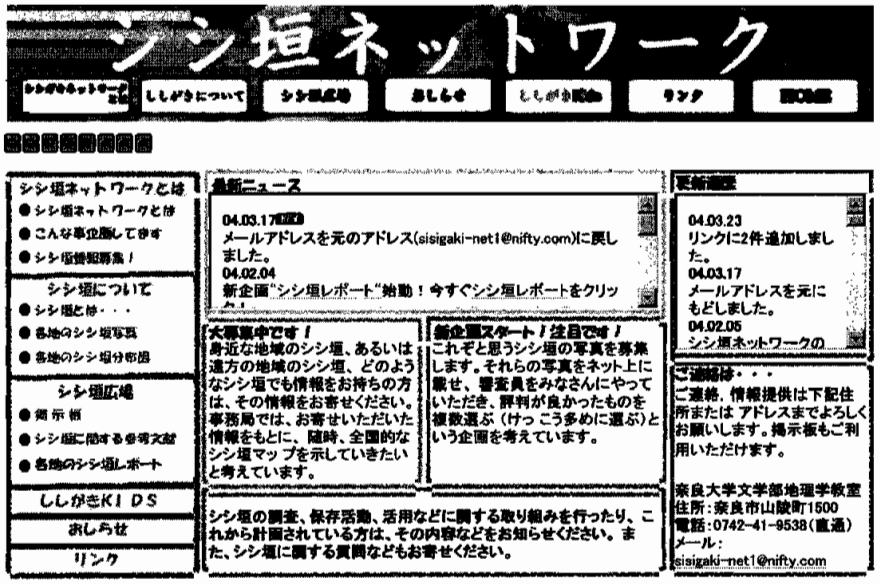

図１　「シシ垣ネットワーク」のホームページ

表１　雑誌「地理」におけるシシ垣記事の連載

①新連載「シシ垣を掘り起こしてみよう！」
　連載開始にあたって、地理47-12，2002年12月、高橋春成（奈良大学）
②シシ垣とは何かーイノシシとの闘いの記録
　地理47-12，2002年12月、矢ヶ崎孝雄（金沢大学名誉教授）
③猪鹿垣を調べるー小豆島・旧大部村（現土庄町内）におけるその現状と特色
　地理48-1，2003年１月、港　誠吾（香川県文化財保護協会理事）
④猪土手・自然との共生を学ぶー長野県塩尻市・しおじり学びの道探検隊
　地理48-2，2003年２月、岩垂俊雄（長野県文化財保護指導委員）
⑤シシ垣探検（前編）ー大学と地域の連携のもとにー
　地理48-3，2003年３月、高橋春成（奈良大学）
⑥シシ垣探検（後編）ー大学と地域の連携のもとにー
　地理48-4，2003年４月、高橋春成（奈良大学）
⑦亜熱帯の島の多様な猪垣ー西表島の地域文化財としての猪垣とその活用の意義
　地理48-5，2003年５月、花井正光（文化庁文化財調査官）
⑧新聞記者が取り組むシシ垣取材
　地理48-6，2003年６月、林　淳一郎（中国新聞社編集局）

写真１　滋賀県の比良山麓に残る石積みのシシ垣と現在の山林所有者

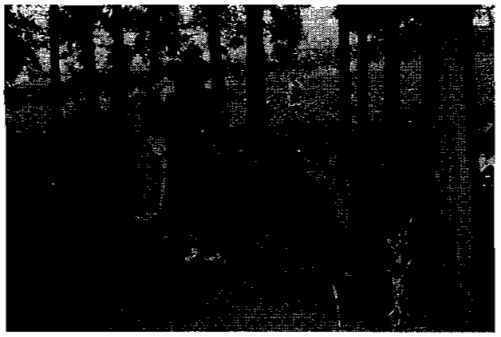

写真２　滋賀県の比良山麓に残る土盛りのシシ垣をみんな（地域の人びとと学生）で調べる

写真３　奈良県川上村でシシ垣を実測する学生たち

写真４　奈良県川上村のシシ垣調査に携わる教育委員会のみなさんと

④マスコミ

このようなシシ垣に関する取り組みは、マスコミでも取り上げられ、一般への関心の拡大につながっている。新聞では、一般の新聞の普通紙のみならず、農業共済新聞のような分野の新聞にも取り上げられた（図２、３）。歴史的・文化的な価値の他に、現在の獣害防止へのヒントを探ろうという視点からも注目されていることがわかる。

中国新聞夕刊　2003年（平成15年）2月21日（金曜日）　特集（30）

猪変（いへん）

「イノシシ博士」奮戦中

5人、中国地方で研究重ねる

野生動物の研究が盛んな欧州に比べ、日本では博士号を取ったイノシシ研究者はまだ、十人もいない。そのうち五人は中国山地や周辺を調査フィールドに選んでいる。中国地方にゆかりの深い「イノシシ博士」五人の横顔を紹介する。

シシ垣に探る共生のヒント

高橋春成さん(51)

「山間部で進む過疎の要因を探るうち、イノシシの問題に行き当たった」。奈良大文学部教授の高橋春成さん(51)は広島大で1970年から12年間、学部生、院生、助手として過ごした当時を振り返る。

調査地に中国山地を選んだ。人口流出で荒れゆく畑や山林は、クマやイノシシたちのすみかと変わり、獣害が過疎化に拍車を掛けていた。地理学の視点から、人間と獣とのかかわり方を研究テーマに据った。

博士論文では、高度成長期に過疎化が進んだ農村部で分布域を広げたイノシシに着目。被害増に伴って捕獲数が伸びる中、都市部のレジャーブームで肉の商品化や飼育が職人になった経過も跡づけた。調査地を小笠原諸島やオーストラリア東で広げ、野生化したブタによる被害も調べた。

広島県守山市の埋土高原の寺に生まれた。研究の傍ら、住職の父を手伝っている。「被害に遭った農家の憤りは分かるが、イノシシはまるきりの悪者じゃない。駆除するにしても、殺生に対する供養の精神を忘れないでほしい」と願う。

昨年秋、イノシシよけで江戸時代などに築かれたシシ垣の遺構や歴史の掘り起こし運動を始めた。古地図や古文書、古老の記憶を手がかりに、住民と探し歩いている。

「シシ垣は郷土の現代と過去をつなぐ、生きた文化財。人間同士や自然との付き合い方、獣害防止のヒントを考え合うきっかけになると思う」

「地域を見つめ直す良好」と、シシ垣の掘り起こし運動を始めた高橋さん（佐賀県北茂安町）

図２　中国新聞の特集で取り上げられたシシ垣調査

農業共済新聞　2003年9月2週号　(6)

文化

シシ垣に学ぶこと

高橋春成

ケモノから村を守った団結力

〈シシ垣とは〉

表題に「シシ垣に学ぶこと」と書いたが、「シシ垣っていったい何?」と思われる方も多いだろう。シシ垣のシシを漢字にすると、「猪垣」あるいは「鹿垣」となる。

シシとは、イノシシ、シカ、カモシカといった肉がとれるケモノ類の古い呼称である。古くから、これらのケモノは山間の住民にとって貴重なタンパク源であったが、一方でイノシシやシカなどは農作物に多大の被害を与える害獣でもあった。

シシ垣（猪垣、鹿垣）は、これらのケモノが田畑に侵入してこないように築かれた垣のことである。

いまでも、江戸時代などに築かれたシシ垣の遺構が各地に残っている。当時は、いまと違って電気柵やトタン柵などがない時代で、石を積んだり、土を盛ったり、木や竹などを組んだりして垣が巡らされた。

シシ垣の遺構の分布は、関東、中部、北陸、近畿、中国、四国、九州、沖縄と全国にひろくみられ、中には長さ10キロ以上といった万里の長城のようなものもある。しかし、これまで、豪族や武士にまつわる古墳や城郭といった遺構が脚光を浴びてきたのにくらべ、農民の汗の結晶ともいうべきシシ垣は注目度が低かった。

けれども私は、シシ垣にはとても高い価値があり、もっと注目される必要があると思っている。シシ垣には、当時の農民の生活が深く刻まれており、地域の財産として極めて貴重である。歴史的・文化的に貴重であるとともに、地域の子供たちの総合学習や環境学習の教材にもなる。

そして何よりも、先祖がどのようにしてケモノと向かい合ってきたのか、その苦労に思いをはせ、今日のイノシシやシカ、サルなどの農作物被害への対応の教訓にすることができる。

☆　☆　☆

〈シシ垣に学ぶこと〉

伝統的な農村社会では、住人たちは農作業、灌漑水路や農道の補修、害虫や害鳥獣の防除、水害対策などを協力し合って行っていた。村落共同体がしっかりしていて、お祭りや冠婚葬祭などもみんなで一体となって行った。

シシ垣は、このような伝統的な社会にあって、田畑と里山の境界付近に、ケモノの侵入を防ぐために村人が共同して造った垣である。一つの集落の住民全員が協力して造ったものもあれば、二つ三つの集落の住民が共同して造ったものもある。

いまの時代はどうだろうか?

兼業化、高齢化、人口流出などによって農業離れがすすみ、田畑周辺には耕作放棄地が増え、里山との境界があやふやになっている。このような中で、イノシシやサル、シカなどが集落周辺に近づき、里中での農業被害が多発している。そして、いまの村落社会では、農業に対する姿勢や取り組みは一体ではなく、ケモノを阻止するマンパワーの不足も明らかである。

いま、多くの中山間の村落が獣害で疲弊しているといわれる。しかし、獣害があるから疲弊しているのではなく、村落社会の足腰が弱っているから獣害を助長しているのではないのか。先祖が生きた伝統的な農村社会の時代は、みんなが一体となって獣害に対応していた。時代は変わり、いま一度、シシ垣の時代を振り返ってみる必要がある。

〈シシ垣の価値を見直そうという目的で、いま「シシ垣ネットワーク」を立ち上げ、情報交換の場をつくっている。興味・関心のある方は、ぜひホームページにアクセスしていただきたい。http://homepage3.nifty.com/takahasi_semi/sisigaki/sisimein.htm〉

（奈良大学文学部教授）

滋賀県多賀町の石積みのシシ垣

図3　農業共済新聞に取り上げられた“シシ垣に学ぶこと”